岩波文庫

岩波書店發行

岩波文庫が、レクラム文庫に範を採り、自由に欲しい本だけを分賣してゐることと、古今東西の文藝、哲學等あらゆる名著を汎く網羅しようとしてゐる事とは、確に立派な特色である。

文庫中に組入れてある原本は、新著を姑く批評外とすれば、大抵、永久的價値を有するもののやうである。しかしその原本も、西洋書であれば、これを飜譯する人の手腕により、日本書であればこれを飜刻校訂する人の用意の如何によつて、本文庫本としての價値は或は上り、或は下るであらう。例へば同じくマルクスの資本論を飜譯するにしても、從來行はれてゐる資本論の各種の版中のいづれを底本とするかによつて差が生ずる。もし底本が良くなければ、折角の飜譯も價値が乏しくなる。底本が定つても、西洋書ならこれを和譯する人の學力によつて又價値に差が生ずる。我が古典たる古事記や萬葉集は、本文庫では假字交りに書き下して讀みやすくしてあるが、その書き下しの際に、下手にすると立派な底本を使つても下らぬものに化する虞がある。私は今、本文庫本の底本の良否を一々鑑別し、又譯する人の學殖や用意にまで一々立入つて批判するだけの力や餘裕は全くない。只、本編輯部に寄贈された數册を讀過した際の感想を述べて、一二の註文を述べたい。

私の信ずる所を假りに正しいとすれば、本文庫本には、どの本にも、一種ごとに底本の性質、價値を詳記し、飜刻、又は飜譯上の用意を細說してほしい。原著者の傳記、原著の價値、後代に對する影響なども略記せられたならば、更に結構である。ところが「價値高き良書を網羅し、校訂、飜譯に於ても最善を期」してゐる本文庫本が、右の用意を盡してくれたのもあるし、ないのもある例へば第十三古事記の如きは、卷頭にもどこにも凡例も序文も何もない。書き下しの訓讀は著者の新訓でなくして、私の見るところでは本居宣長の古事記傳にある古訓古事記によつてゐるやうである。古事記傳をそのまゝ使つて假字交りに書き下したとすればその理由と、古事記傳が今尙最も信用しうる點とを明記してほしいと思ふ。しかしこの文庫本は古事記の飜刻であつて、古訓古事記の飜刻ではないから、古訓古事記そのまゝを飜刻するよりは、本居宣長以後の古事記研究の成果を參考して、宣長の訓讀を訂正してほしいと思ふ。さうして、これらの用意を卷頭に載せてほしいものである。

次に袖珍本であつて普及を旨とする文庫であるから、學者だけを標準とした出版でないのに、註釋が殆ど入れてない。萬葉集、資本論等には若干入れてあるが、これ以上更に多く入れてあれば、讀書家を利することが頗る多いであらうと思ふ。（高橋）

岩波文庫　　岩波書店發行

新訓萬葉集　上卷　佐々木信綱編

古事記　幸田成友校訂

國富論　上卷　アダムスミス著　氣賀勘重譯

國姓爺合戰　合冊　近松門左衞門作　和田　萬吉訂
鎧の櫃三重帷子　カント著　宮本和吉　波多野精一共譯
實踐理性批判　第一卷　トルストイ作　米川　正夫譯
戰爭と平和　伊藤松宇校訂
芭蕉七部集　合作
晉我會稽山　ポアンカレ著　吉田　洋一譯
心中天の網島　マルクス著　河上　肇譯
科學と方法
貨勞働と資本　安倍能成編
網島梁川集　河上　肇　宮川　實譯
マルクス資本論第一卷第一分冊

金鷄文叢　第二

日本政敎の根本問題　安岡　正篤著　金鷄學院刊行
アリストテレス　青木　巖著　岩波書店發行
ウオルタア・ペイタア　工藤好美著　岩波書店發行

寄贈雜誌新聞

昭和二年十月—十一月

哲學雜誌　昭和二年十月號
丁酉倫理會講演集　同　十一月號
敎育心理研究　同　十一月號
哲學青年學苑　同　十月號（創刊號）
東亞の光　同　十一月號
精神科學　同　十月號
生理學研究　同　十月號
學校敎育　同　十一月號
帝都敎育　同　十月號
信濃敎育　同　十一月號
靜岡縣敎育　同　十月號
小學校　同　十一月號
敎材映畫研究　同　十月號
社會學徒　同　十月號
願慧　同　十一月號
帝國大學新聞　昭和二年十月二十四日　十月三十一日
十一月七日　十一月十四日